

功労賞受賞講演

学会誌この15年の歩み

時田 澄男

広辞苑などによれば、「学会」というのは、「学問や研究の従事者らが、自己の研究成果を公開發表し、その科学的妥当性をオープンな場で検討論議する場」である。また同時に、「査読、研究発表会、講演会、学会誌、学術論文誌などの研究成果の発表の場を提供する業務や、研究者同士の交流などの役目も果たす機関」でもある。福井高専の吉村忠與志教授が1982年に組織した「化学PC研究会」は、この意味で実質的に学会の役割を果たしていたが、日本学術会議の登録団体ではなかった。わが国では、学会として公的に認知されるためには、政府の諮問機関である日本学術会議に登録する必要がある。この手続きについてお知恵を授けて下さったのは、埼玉大学の下沢隆教授であった。一方、同じ大学に所属していた著者は、コンピューター・プログラムをはじめとして、化学者が情報関係の仕事を発表する学会誌がきわめて少ないことを残念に思っていた。そこで、1990年ころから、下沢・吉村両先生にお願いして、化学PC研究会の学会化と同時に、学会誌を創刊する企画をたてた。こうして、1992年に、化学ソフトウェア学会と、*Journal of Chemical Software* (JCS) 誌が誕生した。

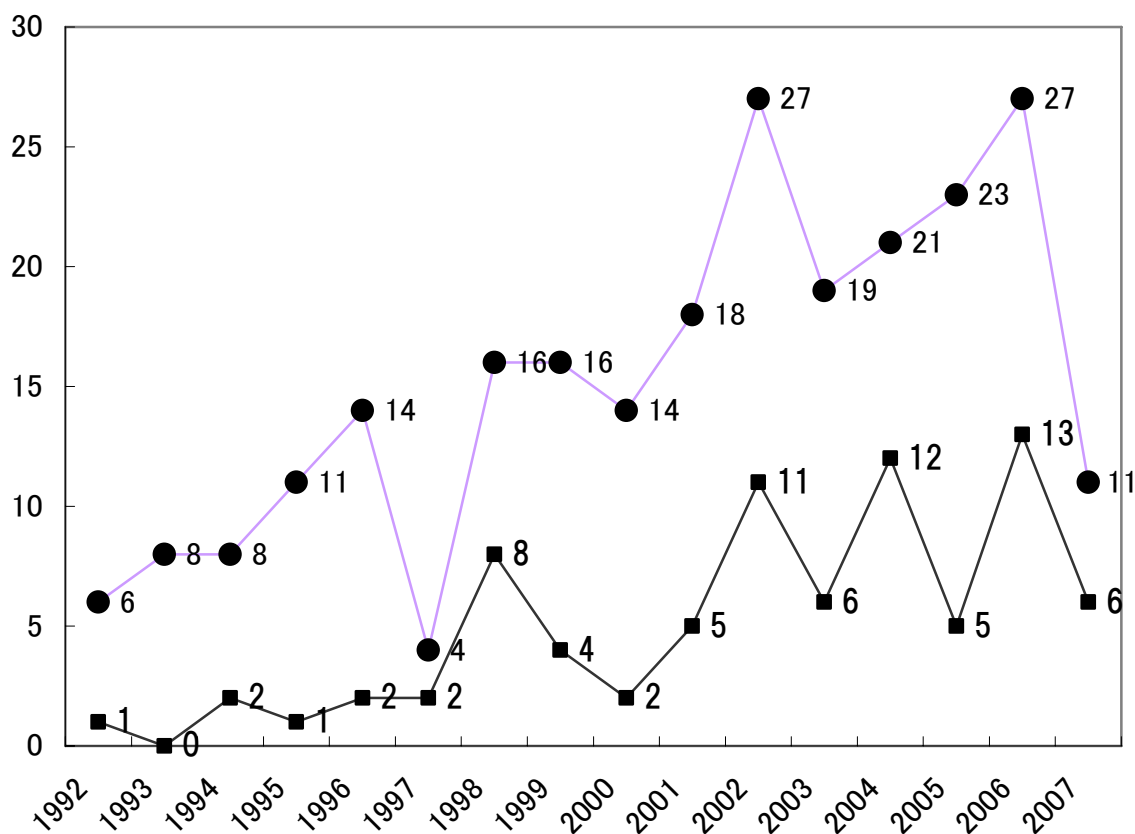


図1. 論文数 (●印)、英文論文数 (■印) の推移

JCS 誌は当初は不定期刊行で、4 号発刊する毎に巻が改まるという形式で出発した。1997 年からは、ようやく年 4 冊の定期刊行となった。そして、学会設立からちょうど 10 年経った 2002 年には、JCPE（日本化学プログラム交換機構）と化学ソフトウェア学会が合併して、新たに、「日本コンピュータ化学会」として、再発足することとなる。JCS も、JCPE の学術誌と合併して、*Journal of Computer Chemistry, Japan* (JCCJ) に衣替えして現在に至っている。

JCS と JCCJ に掲載された論文数の推移を図 1 に示す。年度によって凸凹はあるが、年とともに着実に件数が増加している。この間、1997 年には、わが国の学会としては比較的早期に電子出版の試行を開始し、1999 年からは、JST（日本科学技術振興機構）の J-STAGE から公開している。また、2002 年の JCCJ 創刊を契機に英文投稿規定も制定して国際的な学術誌としての体裁を整えた。2007 年には、電子投稿と審査のシステムも稼働を開始した。

最近、大学における知的生産物を、大学独自の Web-site から論文の本文そのものを含めて公開する「機関リポジトリ」の構築が盛んである。このような情勢を反映して、JCCJ 誌も、2006 年から投稿カードの書式を改めた。すなわち、印刷物の著作権は本会に帰属するが、著者自身またはその所属する公的機関が、その著者の PDF を Web 公開することを、学会の許諾なしに自由に行えることとした。この際、書誌事項や URL を併記することが条件となっている。

大学や公的機関における自己点検評価の動きと関連して、二次情報データベースである Web of Science (Thomson 社) や SCOPUS (Elsevier 社) の利用も盛んとなっている。両者のデータベース構築方針は大きく異なっていて、前者は論文誌の質を評価して厳選するのに対し、後者はよりオープンである。論文の質は、どのような Journal に掲載されたか、被引用回数はどうか、などで議論されることがあるが、その観点では、Web of Science (WoS) の方が、信頼度が高いとされている。現在、日本語を含む論文誌は、WoS にはほとんど登録されていないのが実状である。JCS または JCCJ 誌の英文論文の数は、当初はごくわずかであった (図 1)。しかし、最近は、1 号すべてが英文という号もでてきた (2004 年および 2006 年の第 3 号)。そろそろ、英文誌を独立させて WoS への登録を目指す時機が到来したのかもしれない。

おわりに、学会誌の刊行に日頃尽力されている編集部の太刀川達也幹事、中村恵子さん、電子出版室の中野英彦室長、事務局の長嶋雲兵幹事長、和多田裕子さん、ならびに論文審査員の先生方に御礼を申し上げ、あわせて皆様からの玉稿を今後もお願いして筆を置きたい。